

# かずさの博物誌

## ギンヤンマ ～トンボ釣りのヤンマ～

文・写真／成田篤彦

2015.8.20

昨年の秋のハス田。  
ハスの緑色の葉がそよ風で揺れていた。

夏に咲いた花はハチの巣のような穴が並んだ花床（種が入っている）になっていた。

ギンヤンマが私を追い抜き、ヨシ原の上空を飛んで行った。

不思議なことにギンヤンマの遠ざかる姿はとて大きく見える。

彼らの後ろ姿が大きく感じるの私だけではないらしい。

「蜻蛉行くうしろ姿の大きさよ 中村草田男」という俳句があった。

ギンヤンマは頭、胸が黄緑、腰がスカイブルー、長い腹は赤茶色で黒や黄色の模様がある。透明なはねとつやのある体と緑の彩が、美しい。やはり、ギンヤンマは上総を代表するヤンマだ。



▶ハス田の風景 アオサギが中央にいる  
2014年9月2日 木更津市



▲飛ぶギンヤンマのオス 2014年9月14日 木更津市

別のギンヤンマが、ハスがまばらに生える水面を往復していた。

突然、畦のそばで二匹のギンヤンマが絡み合ったが、姿が消えた。

双眼鏡でのぞくとハスの茎にオスとメスが連結したギンヤンマが止まっていた。

オスが尾の先でメスの首をつかんでいた。透明なはねが思ったより幅広く感じた。

オスもメスも頭や胸の色がハスの茎や葉の色にそっくりだ。

このハス田にはアオサギやシラサギなど多くの天敵がいるが、ハスの茎の間に入り込めば、気付くのは難しいと思う。

さて、昔の俳句集に「はだか子の蜻蛉釣りけり昼の辻 関 更」の俳句があった。

それを読んで昭和二十年代の後半、東北の田舎で年上の子に教わったトンボ釣りをしたのを思い出した。

トンボ釣りとは竹などの先につけた糸の端にメスのトンボを結び



▶連結するオス(上)とメス(下)  
2014年9月2日 木更津市



▲堰の近くの林で休むギンヤンマのメス 2007年5月2日 木更津市

つけ、オスのトンボを誘い捕えることである。

ギンヤンマのオスは池の水面などになわばりをつくりパトロールしながらメスの来るのを待つ。なわばりにメスが現れるとオスがこれを追いつき、交尾する。トンボ釣りはこの性質を利用したものである。

猛暑日に半ズボンで麦わら帽をかぶり、手作りの網で捕ったギンヤンマを糸で結び橋から小川に飛ばした。そこに、ギンヤンマが絡んできたので、急いで、網を振ったが逃げられた。

トンボ釣りは、高度成長時代以前は、全国の子供たちで行われ、日本の懐かしい、夏の風物詩であった。

トンボ釣りには捕る仕掛けの作り方、投げ方の技術、ルール、名称、口ずさむ呪文のような唄（うた）など各地方で独特のやり方がある。

上総でもトンボ釣りで遊んだ方がおられる。早い時期に上総のトンボ釣りを記録し、子供たちに伝えておきたいものである。

memo

ギンヤンマ

トンボ目 ヤンマ科

腹長約五十〜五十八cm。都市化した地域では減少しているが、上総ではハス田や堰などで4月下旬〜十月下旬まで見かける。連結しながら、水生植物などに産卵する。

参考文献 日本民俗文化資料集成

第十一巻 三一書房